

「七夕」は中国が起源の祭りで、日本では8世紀半ばに初めて宮中行事として祝われた。江戸時代初期（1603～1867）には、全国的に行われるようになった。七夕（「7回目の夕方」を意味する）は「星まつり」とも呼ばれる。これは、星のベガとアルタイルを表すある二人の神様、機織の名手である織姫と、牛飼いの彦星にまつわる伝承が基となっている。二人は結婚すると一緒にいることの喜びから日常の仕事を怠けるようになってしまった。その結果、二人は天の川を挟んで引き離され、7月7日に年に一度だけ会うことが許されたのである。ベガとアルタイルは、旧暦の7月7日頃に両方の星が一緒に天に現れる。それは現在の8月初旬にあたる。現在、「七夕」は、全国的に7月7日に祝われているが、今でも8月にこの行事を行う地域もある。

七夕行事では一般的に、飾り付けられた竹の枝に「短冊」と呼ばれる色のついた紙片を掛ける。人々は、願いが叶うようにと短冊に願い事を書く。

能代市は、また一連の祝祭で休日を祝う。祭りのハイライトは、8月3日と4日に行われる「天空の不夜城」（空に浮かぶ城郭型灯籠）と、8月6日と7日に行われる「能代ねぶながし」（または「倦怠感と災難を追い払う」）の2つのパレードである。能代ねぶた流しは「役七夕」と呼ばれることもあり、夏の眠気を妨げる暑さを終わらせるよう願いが込められている。また、病気除けや秋の豊作などの願いも込められている。

どちらのイベントも、巨大なイルミネーションの城郭型灯籠がその特色である。上部に鯀（体は鯉で頭が虎の架空の動物）を乗せた城郭型灯籠が、楽器奏者や歌い手と一緒に通りを練り歩く。「天空の不夜城」には、17.6メートルの「嘉六」と、日本で最も高い城郭型灯籠として知られる24.1メートルの「愛季」の2つの灯籠が使用されている。一方、「役七夕」の期間中、地域ごとのグループは、独自の手の込んだデザインの灯籠をつくる。8月7日には、鯀を米代川に焼き流して祭りのグランフィナーレを迎える。